巻　頭　言

下肢のスポーツ疾患の治療に関する科学的なエビデンスがこの本に集約されています。多くの研究者がスポーツにおける障害・外傷を予防するために，またヒトの身体機能を解明するために行ってきた研究から得られたさまざまな知見が詰まったすばらしい内容になっています。

ここに知識は集約されました。しかし，あなたが知識を得ただけでは何も変わりません。本書で得た知識を使って，実際のスポーツ現場に活かしていくトレーナーもいるでしょうし，本書で得た知識から新たな仮説を立ててさらに研究を深めていく研究者もいるでしょう。今年の大河ドラマ“花燃ゆ”のなかで吉田松陰先生は，“知行合一，知識だけでは意味が無い，行いを伴ってこそ，その知識には意味がある！”と強く述べています。

知識を行動に活かすためにはどうすればよいのでしょう。それは，その知識を鵜呑みにするのではなく，まずは自分の目の前に起きている事実と照らし合わせて合理的かどうかを考えましょう。臨床面では自分の患者さんの病態や介入結果と比べてみて，その知識が受け入れられるかどうか，検証してみましょう。このとき，あなたには多くの情報を受け入れる寛容さと，それを冷静に分析する知性が求められます。それが正しくできるかどうかがその知識を生かせるかどうかの分かれ道です。知性の足りない人はもっと物事をよく考えることからはじめる必要があります。松陰先生のような，しかるべき師に就いて勉強し直してください。

得られた知識が合理的で受け入れられるようなら，次は臨床面で応用してみて，その結果を自分で評価してみましょう。その結果がいままでよりよければその知識は自分の経験のひとつとして，自分の力として永遠に残ります。

このように知識を取捨選択し，実践していくことで，正しい情報，人の役に立つ重要な知識のみが生き残っていきます。臨床への応用はある意味で実験です。臨床家の皆さんも研究者の皆さんも新しい知見を求めて，自分の知性を高めていくよう行動していきましょう。

2015年2月

早稲田大学スポーツ科学学術院　教授　金岡　恒治

SPTSシリーズ第9巻
発刊によせて

SPTSはその名の通り“Sports Physical Therapy”を深く勉強することを目的とし，2004年12月から企画が開始された勉強会です。横浜市スポーツ医科学センターのスタッフが事務局を担当し，2005年3月の第1回SPTSから現在までに10回のセミナーが開催されました。これまでSPTSの運営にご協力くださいました関係各位に心より御礼申し上げます。そして，この度，SPTSシリーズ第9巻を発刊させていただく運びとなりました。

本書は2013年3月に開催された第9回SPTS「下肢のスポーツ疾患治療の科学的基礎：筋・腱・骨・骨膜」における発表を文章化したものです。文献検索は，セミナー発表準備時期である2013年1月前後に行われ，さらに本書の原稿執筆時期である2013年4〜8月ころに追加検索が行われました。したがって，本書には2013年夏ころまでの文献レビューが記載されています。

本書では，下肢に発生するスポーツ疾患のうち，関節疾患を除き，筋・腱・骨・骨膜に主症状を呈する疾患についての文献調査を行いました。このなかには，肉ばなれ，腱炎（腱症），疲労骨折，骨膜炎などが含まれます。いずれもスポーツ現場で多発し，また予定されたスケジュール通りに治療が進まないことが多く，治療プロトコルが確立されていない疾患ばかりです。文献的に無作為化対照研究やメタ分析によって十分なエビデンスは得られないにしても，既知の情報を集約し，次の研究課題を明確にすることは今後の研究に役立つはずです。また，既知の情報を踏まえて現在の治療を見直す必要性に迫られることもあると思われます。最終章には「私の治療法」として3名の著者の治療法を紹介していただきました。いずれも，各先生が実際に行われている運動機能の詳細な評価と機能改善のための治療法を詳しく紹介していただきましたので，スポーツ現場でも活用していただけることと思います。

本書が，下肢のスポーツ疾患に携わるすべての医療従事者，アスレティックトレーナー，研究者のパートナーとなることを祈念しております。臨床家はもとより，論文執筆中の方，研究結果から臨床的なアイデアの裏づけを得たい方，そしてこれからスポーツ理学療法の専門家として歩み出そうとする学生や新人理学療法士など，多数の方々のお役に立つものと考えております。本書が幅広い目的で，多くの方々にご活用いただけることを念願いたします。

末尾になりますが，SPTSの参加者，発表者，座長そして本書の執筆者および編者の方々，事務局を担当してくださいました横浜市スポーツ医科学センタースタッフに深く感謝の意を表します。

2015年2月

広島国際大学保健医療学部総合リハビリテーション学科　蒲田　和芳

【SPTSについて】

SPTSは何のためにあるのか？　SPTSのような個人的な勉強会において，出発点を見失うことは存在意義そのものを見失うことにつながります。それを防ぐためにも，敢えて出発点にこだわりたいと思います。その質問への私なりの短い回答は「Sports Physical Therapyを実践する治療者に，専門分野のグローバルスタンダードを理解するための勉強の場を提供する」ということになるでしょうか。これを誤解がないように少し詳しく述べると次のようになります。

日本国内にも優れた研究や臨床は多数存在しますし，SPTSはそれを否定するものではありません。しかし，“井の中の蛙”にならないためには世界の研究者や臨床家と専門分野の知識や歴史観を共有する必要があります。残念なことに“グローバルスタンダード”という言葉は，地域や国家あるいは民族の独自性を否定するものと理解される場合があります。もしも誰かが1つの価値観を世界に押し付けている場合には，その価値観や情報に対して警戒心を抱かざるを得ません。一方，世界が求めるスタンダードな知識（または価値）を世界中の仲間たちとつくり上げようとするプロセスでは，最新情報を共有することによって誰もが貢献することができます。SPTSは，日本にいながら世界から集められた知識に手を伸ばし，そこから偏りなく情報を収集し，その歴史や現状を正しく理解し，世界の同業者と同じ知識を共有することを目的としています。

世界の医科学の動向を把握するにはインターネット上での文献検索が最も有効かつ効果的です。また情報を世界に発信するためには，世界中の研究者がアクセスできる情報を基盤とした議論を展開しなければなりません。そのためには，Medlineなどの国際論文を対象とした検索エンジンを用いた文献検索を行います。MedlineがアメリカのNIHから提供される以上，そこには地理的・言語的な偏りが既に存在しますが，これが知識のバイアスとならないよう読者であるわれわれ自身に配慮が必要となります。

では，SPTSは誰のためにあるのか？　その回答は，「Sports Physical Therapyの恩恵を受けるすべての患者様（スポーツ選手，スポーツ愛好者など）」であることは明白です。したがって，SPTSへの対象（参加者）はこれらの患者様の治療にかかわるすべての治療者ということになります。このため，SPTSは，資格や専門領域の制限を設けず，科学を基盤としてスポーツ理学療法の最新の知識を積極的に得たいという意思のある方すべてを対象としております。その際，職種の枠を超えた知識の共通化を果たすうえで，職種別の職域や技術にとらわれず，“サイエンス”を1つの共通語と位置づけたコミュニケーションが必要となります。

最後に，“今後SPTSは何をすべきか”について考えたいと思います。当面，年1回のセミナー開催を基本とし，できる限り自発的な意思を尊重してセミナーの内容や発表者を決めていく形で続けていけたらと考えております。また，スポーツ理学療法に関するアイデアや臨床例を通じて，すぐに臨床に役立つ知識や技術を共有する場として，「クリニカルスポーツ理学療法（CSPT）」を開催しております。そして，SPTSの本質的な目標として，外傷やその後遺症に苦しむアスリートの再生が，全国的にシステマティックに進められるような情報交換のシステムづくりを進めて参りたいと考えています。今後，SPTSに関する情報はウェブサイト（http://SPTS.ortho-pt.com）にて公開いたします。本書を手にされた皆様にも積極的にご閲覧・ご参加いただけることを強く願っております。